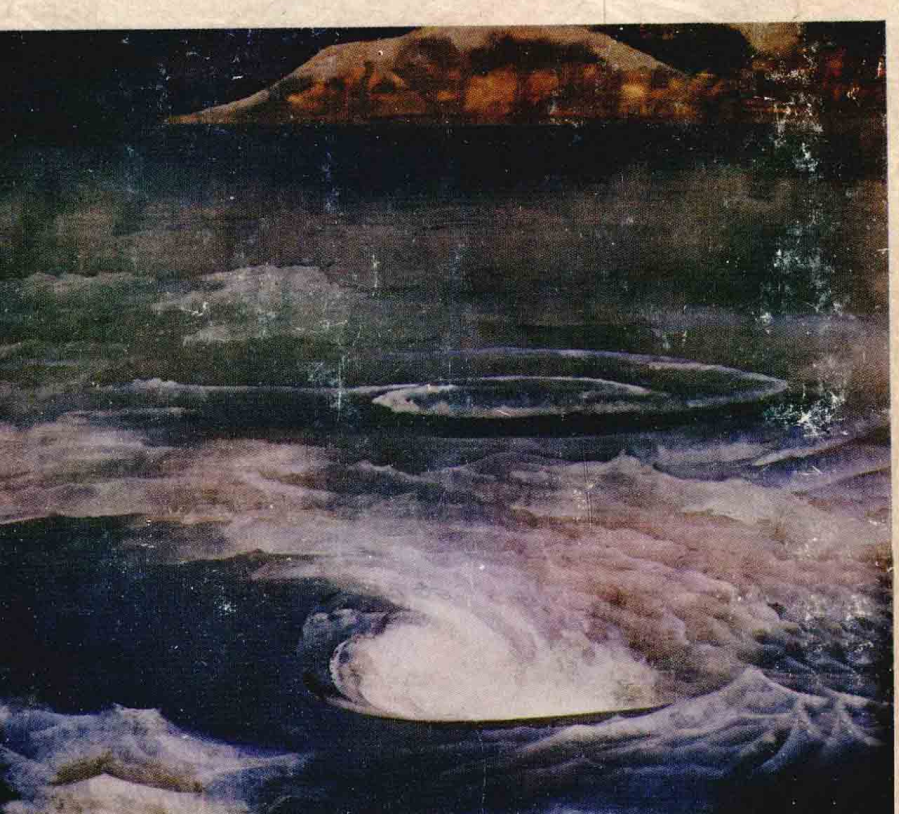
丸谷才一
横しぐれ



横しぐれ

丸谷才一

講談社

横しぐれ

一九七五年三月八日　第一刷発行
一九七六年一二月二五日　第七刷発行

著　者　丸谷才一

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替　東京八―三九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　大製株式会社

© Saiichi Maruya 1975 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

（文1）

目次

横しぐれ　7
だらだら坂　143
中年　165
初旅　229

装　幀・原　弘

カバー画・奥村土牛『鳴門』

（山種美術館蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

横しぐれ

横しぐれ

1

病気になつてから父の語ることは昔の話ばかりだつた。ただ働きづめに働くだけで思ひ出話など滅多にしなかつた人の、かういふ変り方は恐しい。母がそれをどう感じたかは知らないけれど、兄と嫂(あによめ)とわたしは怯えた。もつとも、わたしはときどきほんの数日、帰省するだけなのだが。

体の調子のよい折りに父がぽつりぽつりとしやべつたのは、たとへば、近在の造り酒屋の三男として育つた子供のころの話である。雪のなかを二時間ばかり歩いて中学へ通つた話である。はじめて上京したときの話である。朝鮮で丘の上の病院に勤め、夏は坂を昇るだけで汗まみれになつた話である。たつた三人しか患者が来なかつた、しかもそれが畑ちがひの内科や小児科の患者ばかりだつた開業の日、夜おそく、むづかしいお産の急往診を頼まれ、迎への者が曳いて来た馬に乗つて月夜の道を山中の村まで出かけた話である。すべてこんな調子の遠い昔

のことで、つまり兄やわたしの生れる前のことしか思ひ出さなかつたわけだが、一つだけ例外があつた。戦争のはじまるちよつと前に四国へ行つたときのことを、じつに嬉しさうに語つたのだ。

一体、父は患者への責任をひどく重んじるたちの古風な町医者で、日曜祭日も診察したし、なかなか家をあけようとしなかつたし、東京までなら二時間なのに、学会その他で出かけるのも数年に一度あるかないかで、それもごく短い日数に過ぎない。ところがこの四国旅行は父にしてはのんびりした日程だつた上に、連れにも恵まれてゐた。高等学校の黒川先生といつしよだつたのである。

黒川先生は、父が開業してゐた、つまりわたしが生れ育つた水戸にある、官立の高等学校——もちろん旧制——の国語の教授で、西鶴や秋成や八文字屋本が専門のくせに日曜にはきちんと教会へゆくクリスチャンであり、しかも大の酒好きといふ変り種だつた。父は医学書と医学雑誌しか読まないし、宗教は嫌ひだし、酒はつきあひ程度に過ぎない。つまり何から何まで反対なのに、どういふわけか二人は懇意だつたのだ。共通の趣味と言へばせいぜい碁だが、これはどちらも弱くて、しかも二人とも大して熱心ではないから、別に碁仲間といふわけでもない。要するに気が合つたのだらうと思ふ。そんなわけで兄もわたしも高等学校での保証人は黒川先生にお願ひすることになつたし、文科の生徒だつたわたしは特に親しく指導していただいた。国文学のほうに進んだのも、先生の影響がかなりあるかもしれない。もつとも、わたしの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

専攻は江戸時代の小説ではなく、中世の和歌と連歌なのだけれど。

黒川先生は四国の生れで、つまり何かの事情で郷里に帰る折りに父を誘つたものらしいが、病中の父がいかにもなつかしさうに語つたのは松山での出来事であつた。道後の茶店で休んでゐると、居合せた坊主に馴れ馴れしく話しかけられ、そのうち三人で酒を飲みだして、結局すつかりこちらで持つことになつたといふのである。

「たかられたの？」

「まあ、早く言へばさうなる」

と父は微笑して、

「ちびりちびりと、よく飲む奴でね。坊主と言つても、てくてく歩いて廻る乞食坊主だが。しかし話が上手だつたな。おもしろい話をたてつづけに、あんなにたくさん聞いたことはなかつた。将棋さしの手拭の話なんか、腹をかかへて笑つた」

そして思ひ出し笑ひをしながら、その手拭の話は紹介せずに、

「猥談もうまくてね、あいつ」

わたしはここで奇異な感じを受けた。「猥談」といふ言葉を父の口から聞いたのははじめてだつたからである。わたしはこのとき、自分が大人あつかひされてゐるとは考へずに、もうぢき父は死ぬんだなと思つて、ひどく寂しい気がしたことが忘れられない。

が、大学の助手をしてゐる息子のそんな心細い気持にはおかまひなしに、上機嫌で父はつづ

けた。
「三時間くらゐ飲んだんぢやないか。もつとかもしれない。おれよりずつと年寄りなくせに、むやみに酒が強い坊主だった。何しろ、きりがなくて」
「黒川先生も好きだから」
「うん。でも、とうとうおしまひに、二人が喧嘩をはじめたんだ。それでお開きになつた。喧嘩といつたつて、言ひ争ひだが」
「何のことで？」
「坊主がシナ事変万歳みたいなことを言つたもんだから、黒川が怒つてね。あいつは戦争ぎらひだから」
黒川先生の反戦思想は有名で、高等学校の関係者なら誰でも知つてゐたし、ひよつとすると水戸の人の常識だつたかもしれない。憲兵隊の取調べを受けたといふ経歴の持主だから、みんなは畏敬の眼で眺めたり、噂をささやいたりしたのである。今にして思へば不思議なやうな気もするが、先生を非難する者など滅多にゐなくて、とかく咎め立てするのが好きな右翼的な生徒さへ、先生だけは何となく別あつかひにしてゐた。これはもちろん旧制高校特有の気風のせいもあるし、先生のいささか浮世ばなれした人柄や、そのくせ表立つたところでは危険な台詞（せりふ）を口にしない慎重さのせいもあるけれど、何よりも、先生の反戦的な立場が信仰と結びついてゐると認められてゐたのが大きいと思ふ。と言つても、別にみんながキリスト教に理解があつ

たわけでは決してない。つまり……先生を変り者として遇してゐただけだ。

取調べを受けた事件といふのは、シナ事変の初期、教会の前庭に国旗掲揚台を設けようと牧師が言ひ出したとき、猛烈に反対したところ、それが誰かに密告され、宇都宮かそれとも東京の憲兵隊に呼びつけられたのである。殴られるとか営倉に入れられるとかいふ目には会はなかつたものの、学校当局には軍から申し入れがあつて、一時は進退伺ひまで出したりしたが、当時の校長がよく判つた男で無事にすんだといふ一部始終は、アメリカとの戦争の末期のころにはもう半ば伝説化してゐた——ちようど寮の廊下に出る女の幽霊の話のやうに。

この事件でこりたのだらう、もともと教室では『源氏物語』や『万葉集』の講読をするだけで、余計なことはしやべらないたちだつたさうだが、以後ますますその傾向が強くなつて、たとへ脱線しても軍隊や戦争のことには一言も触れなかつた。そして、祭日のときの御真影へのお辞儀は、教職員全員のなかでいちばん深々と頭を下げるといふ評判だつたけれど、奇妙なことに、この丁寧なお辞儀さへ先生の反戦思想のあらはれ、あるいは国家に対するヒロイックな厭がらせとして取り沙汰されてゐた。鬱屈した時代に生きる若者たちは、どんな形でもいいから反抗の姿勢を示す大人が見たくてたまらなかつたのだし、それに先生はときどき、たとへばわたしの父とか、八木沼といふ地学の若い先生でむやみに碁の上手な人とか、それから卒業生や生徒のなかのごく一部とか、つまり気を許した相手のときは、戦争の成行きを痛烈に皮肉ることがあつたから、かういふ解釈も深読みとは言へないだらう。

だが、こんなふうにいはば黙認され、許容されてゐたのは、高等学校の黒川先生といふ資格のせいである。旅さきではさうはゆくはずがない。

わたしは父に言つた。

「そんな坊主を相手に、あぶないぢやない。信用できさうな男？」

「だからおれも心配した。何しろ、どこの馬の骨か判らないから。だいぶ酒もまはつてたが、黒川のやつ、旅に出て浮かれてたんだな、きつと」

と、またくすくす笑つてゐる父にわたしは訊ねる。

「それで、どうなつた？」

「天気が悪くなつてね。それでまあ、何となく終りになつた。坊主が出て行つたんだ、雨のなかを」

「勘定は払はないで？」

「うん、すたすた行つてしまつた」

「お父さんと先生は雨宿り？」

「それはさうさ」

「それぢや払ふしかないよね」

「うん」

わたしは笑つたが、父は笑つたかどうか、はつきりした記憶はない。わたしはつづけた。

「それで結局、何も迷惑しなかつた？　密告されるといふやうな」
「無事だつた」
「よかつたですね」
「うん」
そのすこし前から父は口数がすくなくなつてゐたが、わたしは気にかけずに、
「それは憲兵隊の事件の前？」
と訊ねた。父は答へないで黙りこんでゐる。別に不機嫌でもないが、どうやら疲れたらしい。そのとき嫂がメロンを運んで来た。わたしはそれをたちまち平らげたけれど、父は二口ほど食べたきりで、眼をつむつた。眠る父に、わたしはしばらくのあひだ団扇(うちは)で風を送つてゐた。大きな蜻蛉(とんぼ)が座敷にはいつて来て、すぐに出て行つた。

2

これが昭和二十七年の夏のことで、翌年の晩春、父が亡くなつた。享年六十七。寝つく前から家業は兄がついでゐたし、わたしは国文学研究室の助手になつてゐたから、わたしの薄給のことなど知らない弔問客は、口々に、後顧の憂ひはないと言つた。
通夜のとき、かなり夜がふけてほとんどの人が帰つてから、黒川先生に四国旅行のことを訊

ねた。先生は父とは五つ違ひの六十二で、もう退職し、講師として新制大学に勤めてゐた。酒量が落ちた程度で、あとは至って元気、と言ってゐたが、この酒量のことにしても、その夜わたしが見てゐたところでは、以前とさほど違はないやうな気がした。

話しかけられた先生は杯を置いて、

「うん、四国ねえ。道後のことを聞いたかい？」

と微笑して、

「おい、おもしろかったな。道後の茶店で坊主にお神酒をあげてさ。さんざん飲まれて。あれは愉快だったな」

と祭壇の写真に語りかけ、それから独言のやうにして、

「世の中には大変な呑兵衛がゐるよ」

と吐息をついた。それがをかしいと言って、もちろん遠慮がちにではあるけれど、居合せた誰彼が笑ふ。わたしは先生にお酌をしてから、また訊ねた。

「ずいぶん話し上手な坊さんだったさうで」

「うん、坊さんと言ったって、あれはお伽衆みたいなものだな。曾呂利新左衛門の口ですよ。次から次へと……」

と言ひながら杯を口に運び、

「とにかく恐しい芸達者。ちょっと泥くさいんですがね。まあ、それは仕方がない。言ってみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com